

結束性と文体

——クライストの『拾い子』について——

廣 川 智 貴

1. はじめに

本稿の目的は、ハインリヒ・フォン・クライストの短編小説『拾い子 (*Der Findling*)』(1811年)における結束性を手がかりとし、この作品の文体的特徴を探ることにある。ここでいう結束性とは、連続する文と文とを関係づけ、より大きな集合へとまとめあげる要素のことである。結束性はテキストにおいてさまざまな形で現象するが、このあらわれ方がしばしば文体指標となることから、文体論においても重要な位置をしめてきた¹⁾。以下では、まず、『拾い子』の分析に必要なかぎりにおいて、結束性そのものについて概観し、ついで、「指示」「接続」「語彙的結束性」に焦点をあて、テキストを具体的に考察したい。

2. 結束性について

多くの場合、テキストは、相互に関連した文が集合し、統一体を形成している。この統一性を保証するのが結束性である。結束性という概念をひろく知らしめたイギリスの言語学者 M. A. K. ハリデーは、「結束性が生じるのは、談話のある要素の解釈 (INTERPRETATION) が別の要素の解釈に依存する場合である。一方を効果的に解読するためには他方に頼らなければならないという意

味で、一方は他方を前提 (PRESUPPOSE) とする」と述べている²⁾。つまり、ある要素が他の要素にどのように依存し、それを前提とするかという点に、テキストの性質があらわれるといえよう。

結束性とは、指示 (reference)、代用 (substitution)、省略 (ellipsis)、接続 (conjunction)、語彙的結束性 (lexical cohesion) からなる概念である。厳密に言えば、結束性には2種類、つまり Kohäsion と Kohärenz があり、これらの区別を主張する研究者もいる³⁾。たとえば、H. ファーターは、今や結束性に関する古典的名著といわれるハリデーと R. ハサンによる共著『英語の結束性 (*Cohesion in English*)』(1976年)に言及して、彼らが2種類の結束性を cohesion という一語で表現していることに異議を唱えている⁴⁾。たしかに、前者は形式上の結束性を、後者は意味上の結束性をさすのだが、実際の文体分析においては、これらの概念をまとめて考えても誤解が生じることはまれなので、この区別に固執することはあまり意味がない⁵⁾。そこで、本稿でも、Kohäsion と Kohärenz を包含する概念として、結束性という術語を使用したい。

先述のように、結束性には5種類あるのだが、そのすべてがテキストの文体指標となるわけではない。『拾い子』では、「指示」、「接続」、「語彙的結束性」がとりわけ重要に思われるので、以下ではこれらの形式と機能に限定して概観したい。

2.1 指 示

「指示」はおもに人称代名詞、指示代名詞、比較によって機能する。ファーターはこの結束性の例として以下のような文をあげている。

(1) Paul hat angerufen. Er kommt morgen.

(2) Paul hat angerufen. Er sagt, er kommt morgen.⁶⁾

(1) は指示代名詞による結束性で、もっとも単純な例である。Er は前文の Paul をうけている可能性が高い。それに対して、複数の指示代名詞が同じ指示対象をさすことがある。(2) がその例であり、いずれの er も、Paul をさすと考えられる。しかし、後者の er は Paul とは別人を指示しうるし、前者の er もひょっとすると Paul ではないのかもしれない。つまり、「指示」に関して重要なのは、たんに機械的に照合するだけでは、どの代名詞が何をさすのかが決定できないということである。「指示」はあくまでも意味による裏づけがあってはじめて特定できるのである。

2.2 接 続

「接続」は結束性を形成する手段の中でもとりわけ重要な位置をしめている。「指示」はそれが結束性を成立させるのを確認するのに、既出の文中に対応する内容を求めればよかった。それに対して、「接続」は、それ自体の意味で結束性を成立させることができる。たとえば、「接続」の種類としては、文のあいだにおける因果あるいは時間的關係をしめすものがある。また、「接続」にあっては、同じような意味内容をもつ接続詞のあいだでの選択、あるいは、接続詞をおくかおかないかという選択の可能性がある。

- (3) Kahn kritisierte seinen Chef. Er wurde entlassen.
- (4) Kahn kritisierte seinen Chef. Daher wurde er entlassen.
- (5) Kahn kritisierte seinen Chef. Danach wurde er entlassen.⁷⁾

話者がこれらの例文で同じ意図を伝達することは可能である。なるほど、明確に因果關係を示しているのは(4)だけであるが、聞き手が(3)と(5)にそのような關係を読み取ることも十分にありうるからである。聞き手は、文が並んでいれば、それだけである種的關係をそこから読みとるだろう。ただし、どのよ

うな関係を読みとるかは、受信者に委ねられている。このように、「接続」の用法は、たんに外的な出来事を表現するだけでなく、話者や読者の心理にまで影響が及ぶので、その機能は多岐にわたる。

2.3 語彙的結束性

「語彙的結束性」もさまざまな手段によって実現されるが、とりわけ反復による例が多い。一口に反復といってもその実現の可能性は多様である。たとえば、フーターは以下のような例をあげている。

- (6) Paul hat angerufen. Paul war sehr aufgeregt.
- (7) Die Katze hier gefällt mir besser als die Katze da.
- (8) "Ich komme vom Norden her."
"Und ich vom Süden."
"Und ich vom Meer."
- (9) Zwei und zwei ist vier.
- (10) Grenzen Grenzen Grenzen Ein Bein Ein Bein Graben Graben Ein Bein
- (11) Und läuft und läuft und läuft.⁸⁾

これらの例が示すように、反復は同じ語が繰り返えされる場合もあれば、同意語あるいは同じ構文を反復する場合もある。いずれにせよ、このような反復をとおして、テキストは結束性を得ることができる。「語彙的結束性」にとつてさらに重要なのは、連語 (collocation) による結束である。反復による結束は同一物を指示するが、連語は互いに関連のある語や一方が他方を連想させることで結束性を維持するので、必ずしも指示対象が同一である必要はない。

2.4 まとめ

これまで結束性を構成する諸要素を概観した。上に挙げられた例からあきらかなのは、結束性とは基本的には文と文との関係に関するものだということがある。ハリデー／ハサンによる理論は、分析のための精密なモデルをたしかに提供してくれる。しかし、クライストのように、主文に副文を複雑に組み込むような長いセンテンスを特徴とする作家の場合、結束性を文と文とのあいだにのみ限定するのは不十分であるといえよう。というのも、それにより細かな文体的特徴を抽出することが困難となるからである。その意味で、ハリデー／ハサンに比べて、より文学的な観点から結束性を論じた W. ガトヴィンスキーが興味深い視点を与えてくれる⁹⁾。ガトヴィンスキーの枠組みは、ハリデー／ハサンのそれに比べれば精密さに欠けるが、文と文とのあいだに関する概念である結束性を、より小さな言語単位である節のレベルにまで引き下げたことは注目に値する。先述のように、挿入につぐ挿入で文を展開してゆくのがクライストの文体の特徴のひとつなのだが、そのような文体を分析するうえで、ガトヴィンスキーの考えは有益であるように思われる。

3. 指示——冒頭を中心に——

テキストを統一のあるものとするには、結束性が存在しなければならない。R. ハルヴェクが「文体とはテキストが構造化される手段と方法である¹⁰⁾」というように、いかなる要素が結束性によって構造化されているかという点に作家の文体があらわれるといえよう。クライストの散文作品からうける、読者をなかば強引に作品世界へと引きこむような印象も、この結束性の性質に大きく依存している。とりわけ、「指示」による結束がこれに寄与しているように思われる。この種類の結束はテキスト全体にわたっているために、そのすべてを挙げることはできない。そこでここでは、作品の冒頭に限定して記述、分析することにしたい。

『拾い子』は全部で19の段落からなるテキストである。その中でも重要なのは最初の段落であろう。そもそも、文学的テキストは、そのはじめと終わりが「枠」を構成しており、読者は小説の冒頭部分で現実世界から虚構世界へと足を踏み入れることになる。その虚構世界がいかなるものであるのかを示すのが冒頭部分であるのはいうまでもない。W. ライブレは、テキスト言語学による文学テキストの分析の可能性について述べた論考の中で、いかに登場人物が導入され、それが展開されるかを規準にして物語テキストの冒頭を5つのタイプに分類しているが、このように作品の冒頭は、その性質がもっとも明確にあらわれる箇所なのである。¹¹⁾

それでは第1段落をみてみることにしよう。この段落には、すでにクライストの文体を特徴づける結束性がみられる。ここにみられる「指示」に関連した結束性を挙げるとするならば表1のようになる。¹²⁾ この一覧表を参考にして、具体的に第1段落の第1, 2文をみることにしよう。

(1) Antonio Piachi (原文はイタリック), ein wohlhabender Güterhändler in Rom, war genötigt, in seinen Handelsgeschäften zuweilen große Reisen zu machen. (2) *Er pflegte dann gewöhnlich Elvire (原文イタリック), seine junge Frau, unter dem Schutz ihrer Verwandten, daselbst zurückzulassen.*
¹³⁾
(199)

結束性の観点からみて、『拾い子』のはじまりは効果的であり、作品の開始にふさわしいといえる。「ローマの裕福な不動産業者」であるアントニオ・ピアキが第1文で導入されたあと、第2文がそれに続き、彼の妻エルヴィーレが登場する。引用者によるイタリックからあきらかなように、この第2文には前文とのつながりをしめす結束性の要素を4つ確認することができる。いずれも「指示」による結束である。ピアキをうける人称代名詞、所有冠詞の *er* と *sein*, 商用旅行という習慣をうける *dann*, そしてローマをさす *daselbst* とい

表1. 第1段落における結束性の分布
(ただし、「指示」にかぎり、後方照応はのぞく)

段落	文番号	結束的項目	タイプ	距離	被前提項目
1	2	er	R11.6	0	Piachi
1	2	dann	R22	0	große Reisen
1	2	sein	R11.8	0	Piachi
1	2	dieselbst	R22.7	0	Rom
1	3	dieser	R22.6	0	große Reisen
1	3	Reisen	L1	0	Reisen
1	3	ihn	R11.6	M1	Piachi
1	3	sein	R11.8	M1	Piachi
1	3	ihm	R11.6	M2	Piachi
1	3	sein	R11.8	M1	Piachi
1	4	hier	R21.7	0	Ragusa
1	5	Piachi	L1.6	N3	Piachi
1	5	davon	E	0	第4文
1	6	doch	C21.1	0	第5文
1	6	er	R11.6	0	Piachi
1	6	sein	R11.8	0	Piachi
1	6	er	R11.6	0	Piachi

うように、結束性は緊密に保たれていて、読者を作品世界へと導こうとする語り手の意図がみてとれる。先述のように、一般に結束性とは、文と文との関係をさすことが多く、ここでもそこに焦点をあてているので引用ではとくにイタリックで表記していないが、ガトヴィンスキーにならって同一文中の結束に注目すると、(1)の sein がピアキを、(2)の ihr が Elvire をさしているのを確認することができる。

表1からもあきらかなように、第1段落ではピアキをさす人称代名詞、所有

冠詞が結束性を形成する中心的要素となっており、それ以外の結束的項目をもふくめてきわめて緊密な結びつきが実現されている。これは結束的項目と被前提項目の距離が近いことからあきらかである。すなわち、ほとんどの場合、両者を隔てる距離は、ゼロかたとえ離れているにしても人称代名詞を介して一文を隔てるだけである。たしかに、ピアキに関しては、結束項目と被前提項目が離れ、人称代名詞が続くような例もある。しかし、語り手はそのような場合でも、Piachi という固有名詞を反復することで、あらためて読者に解釈の手がかりを提供している。第3文にも6個の、そして第6文においても5個の「指示」を中心とした結束要素がみられるが、このようにして語り手は、冒頭で幾重にもテキストを結びつけることで、読者を作品世界へとたくみに導入しているのである。そしてこれがこの作家に特有の緊張感にみちた文体を構成する一要因となっているように思われる。

4. 接続——文接続辞の und——

結束性の観点からみてさらに興味深いのは、文接続辞としての und が文頭でしばしば使用されているということである。このような使用例は全部で19みられるが、ここではその中から特徴的なものをとりあげることにしたい。

英語圏においては、「文を "and" あるいは "but" ではじめてはならない」というのがよく知られた作文上の戒めであるらしいが、¹⁴⁾ but に相応する aber はおくとしても、少なくとも and にあたる und に関しては、そのような教えがドイツ語にもあてはまるように思われる。というのも、ドイツ語のテキストも空間的には左から右へと進行するので、文と文とのあいだにはすでにその線状性のゆえに und の機能が含まれているからである。したがって、前文への接続として使用される並列接続詞 und は、読者に冗長な、いやそれどころか不要なものであるという印象をあたえるかもしれない。にもかかわらず、『拾い子』の語り手は、あえて und を使用することで、前文との接続をおこなって

いる。それでは、語り手はそのような操作をすることで、どのような効果をねらっているのであろうか。

文接続辞としての *und* は、テキストにおける2つ以上の文の関連性をあらかわす結合機能をもつものであり、ハリデー／ハサンの分類に従えば「接続」に属し、その下位区分である付加的 (additive) な意味をもつ代表的な接続詞である。そもそも「接続」は、先にみた「指示」のように対応関係にもとづく結束性ではなく、固有の意味にもとづいて作用する。したがって、まずは並列接続詞 *und* の基本的な意味、機能にふれておく必要があるだろう。

ヘルビヒ／ブッシャによると、並列接続詞の基本的な機能は、「同一レベルの主文あるいは文肢¹⁵⁾」を結びつけることにある。つまり、この接続詞によって、「主文の結合」、「文肢の結合」、「同一レベルの副文の結合¹⁶⁾」が可能となる。さらに、並列接続詞 *und* は、主文、副文、文肢の並列を形成したり、連辞 (= <そして>¹⁷⁾) の意味をもつ。その他にも、「特定の用法においては、*und* の後に来る平叙文あるいは命令文を *daß* 文ないしは不定詞句に置き換えることもできる」例、「条件」や「増強的反復」の例などが挙げられている¹⁸⁾が、これだけでは文接続辞 *und* の文体的効果を十分に表現することはできない。

とりわけ注目したいのは、*und* により結合される文と文が並列関係だけでなく、しばしば従属関係にもあるということである。『ドイツ語不変化詞辞典』にしたがってそのような用法を要約すると以下ようになる (なお、意味を明示するために例として挙げられている副詞をカッコ内に示す)。(1) 時間的接続 (*da*, *dann*), (2) 先行発言からの帰結 (*daher*), (3) 先行条件に対する結論 (*so*), (4) 先行発言にしめされた状況 (*da*), (5) 同時 (*da*), (6) 相反関係 (*währenddem*), (7) 条件, などが主な用法である。そこで、これらの分類をもとにして、『拾い子』ではどのような用法がみられるのかを確認しよう。

(1) Piachi ließ halten; *und* auf die Frage: was er wolle? antwortete der Knabe in seiner Unschuld: er sei angesteckt; (...) (199)

(1) は作品の冒頭でピアキとニコロとが出会う場面である。郊外を走っていたピアキの馬車は、心を取り乱したひとりの少年によって停車を余儀なくされる。ここではピアキが馬車をとめさせ、ニコロに質問し、ニコロがそれに答えるという経過が、ほぼ時間の流れにそって描写されている。ここでの und は時間的接続を示すものであり、きわめて一般的な用法であるといえる。また、物語内容と物語言説もほぼ一致しており、意味的にも矛盾のない (1) にあっては、接続詞 und がどうしても必要というわけではない。語り手はこの接続詞を後続文の文頭におくことにより、時間的経過のみならず、テキストの結束性が形式的にも堅固なものであることを強調しているのである。

(2) Der Junge, sobald er den Alten nur verstanden hatte, nickte und sprach: o ja! sehr gern; *und* da die Vorsteher des Krankenhauses, auf die Frage des Güterhändlers: ob es dem Jungen wohl erlaubt wäre, einzusteigen? lächelten und versicherten: daß er Gottes Sohn wäre und niemand ihn vermissen würde; so hob ihn Piachi, in einer großen Bewegung, in den Wagen, und nahm ihn, an seines Sohnes Statt, mit sich nach Rom. (200)

(2) も同じく冒頭からの引用である。ある時、ピアキとその息子パウロは、商用のためラグーザに出かけていた。そこでふたりは「拾い子」ニコロと出会う。ニコロは折りしもラグーザで蔓延していたペストに感染するが徐々に快復へと向かう。だが、パウロだけがこの病に感染し、命を落とすことになる。そこでピアキは失った息子のかわりに「いっしょに旅をするつもりはないか」とニコロに尋ね、それに答えるのが引用の場面である。

ここにみられる und も一見不要であるようである。ピアキの言葉を理解したニコロは、うなずきながら「もちろん！よろこんで」と、そして病院の院長もピアキの問いに答え、ピアキがパウロのかわりにニコロを馬車に乗せて旅立

つ。(1)と同様にこれら一連の物語内容は物語言説とほぼ並行しており、接続された2文のあいだにはやはり接続詞が必要なほど意味の断絶はない。したがって、ここでも意味的には *und* が、それほど大きな役割を果たしているとはいえない。にもかかわらず、この接続詞を挿入しているのは、さきほどと同様に、前後の結束が論理的であることを際立たせようとする語り手の意図がはたらいっているからであろう。

(3) (a) *Mehrere Tage lang sprach Piachi kein Wort mit ihm; (b) und da er gleichwohl, wegen der Hinterlassenschaft Constanzens, seiner Geneigtheit und Gefälligkeit bedurfte: (c) so sah er sich genötigt, an einem Abend des Alten Hand zu ergreifen und ihm mit der Miene der Reue, unverzüglich und auf immerdar, die Verabschiedung der Xaviera anzugeloben.* (206)

(3)にみられる *und* において重要なのは、この接続詞が、(a)と(b)とのあいだにある時間的接続というよりもむしろ、ピアキとニコロが仲違いしていたという事実(a)とその逆接(b)を結合していることである。原文を素直に読めば、(b)を(a)と意味的に結びつけるのは「にもかかわらず」(*gleichwohl*)であろうが、このような逆接的な意味を順接の接続詞 *und* が結びつけている。意味的な接続が *gleichwohl* によってなされているとするならば、(b)の文頭に位置する *und* は形式的な機能をもつにすぎない。だがこれこそ語り手の意図であるように思われる。語り手は *und* をまさに形式的にもちいることで、テキストが論理的な構成を備えていることを強調しているのである。

(4) *Er (=Nicolo) legte sich mit klopfendem Herzen in das Fenster des Korridors, von wo aus er, ohne seine Absicht zu verraten, den Eingang des Zimmers beobachten konnte; und schon glaubte er, bei einem*

Geräusch, das sich ganz leise am Riegel erhob, den unschätzbaren Augenblick, da er die Scheinheilige entlarven könne, gekommen: (...) (207)

(4) は『拾い子』の中であってとりわけ緊張感あふれる場面である。この場面にさきだって辱めをうけた主人公ニコロは、エルヴィーレの部屋を通りかかったとき、彼女がおそらくはある男性に歓喜にあふれた声で語りかけるのを耳にする。エルヴィーレとその男性が密会している現場をおさえれば、ニコロはエルヴィーレを逆に辱めることができる、そう考えたニコロが部屋の様子をうかがい、その男性の存在を確認しようとするのが引用の場面である。ここで使用されている und は、先述の分類に従うならば、(5) 因由 (= denn) に相当するといえよう。翻訳の中にはこの例文にみられる und を並列的にとらえて、「そして」と訳しているものもあるが、それではこの箇所のおもしろみがなくなってしまう。というのも、語り手は、因由の und を使用することで理由を後におき、それによってサスペンスの効果をもたらしているからである。

(5) Nicolo erschrak, er wußte selbst nicht warum: *und* eine Menge von Gedanken fuhren ihm, den großen Augen des Bildes, das ihn starr ansah, gegenüber, durch die Brust: doch ehe er sie noch gesammelt und geordnet hatte, ergriff ihn schon Furcht, von Elviren entdeckt und gestraft zu werden; er schloß, in nicht geringer Verwirrung, die Tür wieder zu, und entfernte sich. (207)

(5) にみられる und はどうであろうか。ニコロが理由もわからずに驚くという文、発見した像に相対していると諸々の考えが彼の胸をかすめるという文、これらはすでにコロンの (Doppelpunkt) によって接続されている。コロンはいうまでもなく denn, folglich, nämlich といった語の代用として使用されるもの

²⁰⁾である。したがって、ここでの und も読者に冗長な印象をあたえかねない。再三再四述べてきたように、冗語ともおもえる文接続辞の und は、ここでも形式的な論理性を強調している。

(6) Mehrere Wochen, der Gastfreundin, die man bewirtete, aufgeopfert, vergingen in einer dem Hause ungewöhnlichen Unruhe; man besuchte, in- und außerhalb der Stadt, was einem Mädchen, jung und lebensfroh, wie sie war, merkwürdig sein mochte; *und* Nicolo, seiner Geschäfte im Kontor halber, zu allen diesen kleinen Fahrten nicht eingeladen, fiel wieder, in Bezug auf Elviren, in die übelste Laune zurück. (209)

田舎に帰っていたエルヴィーレは、従兄弟の家からローマを見物したいという一人の親類の女性を連れてもどってくる。エルヴィーレは、その従兄弟と観光をともにする一方で、ニコロは仕事のために同行できず機嫌をそこねるというのが引用箇所である。ここでは und が、相反関係 (währenddem) をあらわしている。

(7) Er begann wieder, mit den bittersten und quälendsten Gefühlen, an den Unbekannten zurück zu denken, den sie in heimlicher Ergebung vergötterte; *und* dies Gefühl zerriß besonders am Abend der längst mit Sehnsucht erharrten Abreise jener jungen Verwandten sein verwildertes Herz, da Elvire, statt nun mit ihm zu sprechen, schweigend, während einer ganzen Stunde, mit einer kleinen, weiblichen Arbeit beschäftigt, am Speisetisch saß. (209)

引用 (7) は (6) の直後に位置している。エルヴィーレにつれなくされたニコロは、彼女が崇拜する人物のことを考えて苦悩する。エルヴィーレを思う

「苦々しく悩ましい気持」は、ある日の夕方まで持続することになることから、(7)にみられる und は時間的に使用されているといえよう。限られた紙幅で物語を展開しなければならない短編小説にとって、時間の操作はきわめて重要である。短編小説においては、物語内容を圧縮したいいわゆる「要約法」あるいは「省略法」がしばしばみられるが、具体的な時間は明示されないものの、(7)でも「苦々しく悩ましい気持」を抱きはじめてからその頂点に達する夕方までの比較的長時間が省略されている。しかし、時間的接続をあらわす und は、"Er sprang auf und sprach zu mir.", "Ich frage: "Wo wollen Sie hin?" Und er antwortete: "Ich suche eine Herberge." という例が示すように、比較的小さな時間的間隔を結びつけることが多い。しかるに、(7)ではともすれば数週間にもおよぶ時間の溝が、und によってなかば強引にうめられている。比較的長期にわたる時間的断絶を論理的に結びつけ、テキストにまとまりをもたせようとする語り手の意図が、この接続詞 und にはあらわれている。

(8) Er fühlte wohl, daß Elvirens reiner Seele nur durch einen Betrug beizukommen sei; *und* kaum hatte ihm Piachi, der auf einige Tage aufs Land ging, das Feld geräumt, als er auch schon Anstalten traf, den satanischen Plan, den er sich ausgedacht hatte, ins Werk zu richten.
(212)

ニコロはエルヴィーレが崇めるコリノが自分に似ていることを知り、彼に変装してエルヴィーレを驚かせようとする。その機会をうかがっているのが(8)の引用である。ここでは und が「先行発言からの帰結」を意味している。

und から一般的に想起されるのは並列および付加的な意味であるが、『拾い子』の語り手は、それのみならず従属的あるいは結束性の記号として、この接続詞を多用する。その意図は、一言でいえば、ふたつの文を分断しつつも結合し、談話を先へと継続させることにあるといえよう。『拾い子』における文接

続辞 und は、セミコロンにつづいて配置される場合がほとんどであった。いうまでもなく、セミコロンにも文を区切りつつ継続するという機能があるが、und をおくことでこの機能がよりいっそう強調されているのである。

5. 語彙的結束性——固有名詞の引き延ばしとアナグラム——

『拾い子』は、そのタイトルが示しているように、「拾い子」ニコロを中心として筋が展開する。ところが、語り手は、第1段落において、ニコロ以外の主要人物、すなわち、ピアキ、エルヴィーレ、パオロを彼らの名前と共に登場させるのだが、ニコロの名には言及しない。第1段落では、ピアキを被前提項目とする人称代名詞が結束性の中心であったが、第2段落においては、ニコロとピアキがその割合を二分する。ニコロにみられる結束性のタイプも、ピアキの場合と同様に、主として人称代名詞によるものなのだが、興味深いのは、ニコロにあっては被前提項目が彼の名前ではなく、大部分が「少年 (der Knabe)」だということである。したがって、人称代名詞による結束性が多用される中において、この「語彙的結束性」は前景化されることになり、ひととき読者の注意をひく。つまり、ニコロをさす der Junge, der Knabe といった語彙的結束が、人称代名詞による結束の連鎖から浮かびあがってくるのである。ニコロという固有名詞は、第3段落になってようやく登場するが、そこにいたるまで語り手は、ニコロの結束を年少性をあらかず語彙 (der Junge, der Knabe) でおこなっている。それにより、これらの語彙は、それと対立して der Alte とよばれるピアキとも結束することになる。すでに述べたように、「語彙的結束性」は、同一の指示対象をもつとは限らない。ここでも、年齢をしめす意義素をもつ語彙 (der Junge, der Knabe, der Alte) が連想によって結びついており、これにより両者の関係性が示唆されているのである。

このように、語り手は、人称代名詞による指示、そして年少性に関する語彙を使用してニコロ (Nicolo) という固有名詞の導入を引き延ばすのだが、これ

は読者に緊張を強いる効果をもつ。今一度、作品の標題を思いおこしてみよう。注目したいのは、読者が最初に目にするはずのタイトルに、すでに定冠詞が付されていることである。定冠詞も結束性を構成する要素のひとつであり、幾通りかの機能をもつが、その主たるものは「言語的脈絡による特定化」であるといえよう。²¹⁾ いうまでもなく、コミュニケーションの過程で既知となった情報に言及する際に使用されるのが定冠詞の基本的な用法である。しかるに、タイトルの前にはテキストが存在せず、したがって、未知であるはずの Findling に定冠詞がもちいられているのは文法から逸脱している。²²⁾ この逸脱によって、語り手は、読者が「拾い子」に関する情報をもっているということを前提としている。そのような語り手の期待にこたえるべく、読者は「拾い子」の情報をいち早く得ようとするだろう。しかし、第1段落には、「拾い子」以外の人物の名前にしかふれられていないので、読者は Nicolo という「拾い子」の名前を目にするまでは緊張せざるをえない。その結果、こうして読みすすめた読者には、Nicolo という名がいつそう深く脳裏に刻みこまれることになる。そしてこれこそが、語り手のねらいであるように思われる。

クライストはしばしば人名のアナグラムをもちいた。この言語遊戯は決してお遊びではない。むしろ作品の主題を浮き彫りにするとさえいえる。たとえば、『サント・ドミンゴ島の婚約 (*Die Verlobung in St. Domingo*)』(1811年)である。この作品は、クライストの存命中に二度印刷されているが、これら作者自身が関与したテキストにおいて、主人公グスタフ (Gustav) は狂気、錯乱状態にあるときはアウグスト (August) として記されている。『拾い子』においても、ニコロ (Nicolo) とコリノ (Colino) がアナグラムとして機能しており、作中で語り手自身がその種明かしまでしている。この言語操作は、『拾い子』のみならず、クライストのほとんどすべての作品にあらわれるドッベルゲンガー・モチーフ²³⁾を支えている。

人名のアナグラムは、『拾い子』においても、作品を理解するうえで重要な位置を占めているのだが、この操作は読者がそれに気づいてはじめて意味をも

つ。『サント・ドミンゴ島の婚約』についていえば、定評のある全集の注に「作者の四度にわたる誤記」と記されていることからわかるように、専門家ですら GUSTAV-AUGUST のアナグラムを理解することができなかつた。²⁴⁾したがって、一般の読者がこれを理解しなかつたとしても、それは当然のことであろう。成立年代は『サント・ドミンゴ島の婚約』が1811年初頭、『拾い子』が1811年の夏であるとされるから、ひょっとするとクライストは、読者の理解が容易になるよう、『拾い子』においては、わかりやすくアナグラムを導入する必要を感じていたのかもしれない。作者クライストの意図がどうであれ、「指示」とニコロの性質をあらわす語彙による「語彙的結束性」は、Nicolo という固有名を引き延ばすことになり、それによって読者はこの語に注意を向けざるをえなくなる。そしてその結果、テキストのなかばで明かされるアナグラムの理解が容易になるのである。

ところで、『拾い子』は読者の批判にさらされてきた。しかし、この作品に否定的な評価をあたえたのは、同時代の読者だけではなかつた。後の研究者ですら『拾い子』を消極的に評価する傾向にあったといえる。その理由としてあげられるのが、不自然なハンドリングであり、とりわけニコロ／コロノのドッペルゲンガー・モチーフであった。たとえば、H. M. ヴォルフは「『拾い子』は奇妙な混乱に病んでいる」といい、ドッペルゲンガー・モチーフの挿入が余計なものであると主張する。²⁵⁾しかし評家がこのモチーフをどのように判断するにせよ、語り手はこのモチーフのための準備を冒頭から周到におこなっているのである。

6. 近接の指示代名詞 *dieser*

また、『拾い子』では、近接の指示代名詞 *dieser* の付加語的用法が効果的に使用されている。²⁶⁾この指示詞の機能は、すでに指示されたものに特別な注意をうながし、読者の理解を助ける点にある。²⁷⁾つまり、通常、テーマの連続は人称

代名詞によって表現されるが、そのテーマのヴァリエーションが必要となるとき、指示代名詞は、ほんらいの指示対象とそのヴァリエーションとが同一であることを強調しつつ示唆するのである。H. ヴァインリヒの言葉でいえば、この代名詞の特徴は「強調 (Auffälligkeit)」にあるといえよう。²⁸⁾ ヴァインリヒによると、テキストにあらわれる単純な冠詞と指示代名詞の平均的な割合は10対1であるというから、話者が近接の指示代名詞を使用するのは、多かれ少なかれ指示対象が重要な意味をもつときであると考えられる。

ヴァインリヒにしたがって指示代名詞の主なタイプを要約すると以下のようになる。1. 固有名詞につづいてジャンルの名詞が導入される場合 (Amsterdam - diese große Stadt.)。2. 名詞 (ジャンルの名詞) が、類似した意味を備えた同義語により導入される場合 (das Haus - dieses Gebäude.)。3. さまざまな要素からなる詳細な記述が総括的に凝縮される場合 (Zucker, Kaffee, Reis - diese Waren.)。4. 前に直接、間接、あるいは、体験話法で表現された言葉や考えが、総括的な表現によって導入される場合 ("Armer Kannitverstan" - mit diesem Gedanken.)。5. 客観的な描写が主観的な評価に変わり、それにより別の有効価値をもつ場合 (der Dichter Johann Peter Hebel, dieser weltkundige Provinzer.)。6. 名詞が異なった意味をもつ同格により分類される場合 (Hebels "Kannitverstan" - diese köstliche Geschichte.)。²⁹⁾ 以上がヴァインリヒによる分類である。

ヴァインリヒによる考察は、その用例が具体的な文学的テキストに基づくという意味で、きわめて文体論的である。ただ、この分類だけでは、クライストの文体に迫ることは困難であるように思われる。というのも、ヴァインリヒの分類は、おもに指示するものと指示されるものとの意味的連関においてなされているが、『拾い子』においては、それにくわえて統語的關係も重要な役割をはたしているからである。

『拾い子』において、指示代名詞 dieser の付加語的用法は26例である。特筆すべきは、そのうちの16例が動詞あるいは形容詞から派生した名詞に付加されているということである (具体的には13例が動詞派生語、3例が形容詞派生

語である)。とりわけ、指示代名詞 *dieser* と名詞 *Vorfall* との結合が 4 例あり、しかもそれが集中してあらわれているということは注目に値する。ほんらいなら *Vorfall* 以外の統語的結合をも詳細に分析しなければならないが、ここでは作品の理解にとり重要である *Vorfall* に限定したい。まずはその用例を挙げることにしよう。

(1) *Dieser Vorfall*, bedauernswürdig an sich, weil ein tugendhaftes und wohlgezogenes Wesen verloren ging, war es doppelt, weil er den beiden Leidenschaften Nicolos, seiner Bigotterie und seinem Hange zu den Weibern, wieder Tor und Tür öffnete. (205)

(2) Elvire schlug bei diesem Anblick die Augen nieder, kehrte sich, ohne ein Wort zu sagen, um, und verließ das Zimmer; weder Piachi, noch sonst jemand, erfuhr ein Wort von *diesem Vorfall*, sie begnügte sich, mit betrübtem Herzen bei der Leiche Constanzens, die den Nicolo sehr geliebt hatte, niederzuknien und zu weinen. (205)

(3) *Dieser Vorfall*, der ihn tief beschämte, erweckte in der Brust des Unglücklichen einen brennenden Haß gegen Elviren; denn ihr glaubte er den Schimpf, den ihm der Alte vor allem Volk angetan hatte, zu verdanken zu haben. (206)

(4) Je mehr er über *diesen sonderbaren Vorfall* nachdachte, je wichtiger ward ihm das Bild, das er entdeckt hatte, und je peinlicher und brennender ward die Neugierde in ihm, zu wissen, wer damit gemeint sei. (207)

以上の(1)から(4)の例をヴァインリヒにしたがって分類するとすれば、いずれも「3. さまざまな要素からなる詳細な記述が総括的に凝縮される場合」に相当するといえよう。(1)における「この出来事」は、ニコロの妻コンスタンツェが生まれたての子とともに産褥で死んだことを、そして(2)の「この出来事」は、ニコロがコンスタンツェの埋葬もすまさぬうちにクサヴィエラ・タルティニの侍女と密会していたことをさす。また(3)の「この事件」とは、ピアキによってすり書きかえられた手紙にだまされたニコロが、亡くなった妻コンスタンツェのことを忘れて恋人クサヴィエラに会いに行くが、待ち合わせ場所であるはずの教会ですでに葬儀がいとなまれていたという、ニコロを侮辱する一連の出来事をさす。(4)の「この不思議な事件」とは、エルヴィーレが何者かと密会していると信じたニコロが、彼女の部屋に人間ではなく肖像画を探しあてるといふ出来事のことである。このように、(1)から(4)では、個々の出来事の総括が指示代名詞によっておこなわれている。そして、この代名詞によってまとめられた出来事は、いずれも『拾い子』の展開にとって欠くことのできないものである。

(1)から(4)にみられた一連の出来事は、作品のほぼ中間部に集中しているが、これらはいずれもニコロがコリノを装い、別のニコロとなってゆく、いわば転換点のための準備となっている。『拾い子』はニコロの成長の物語であるともいわれるが³⁰⁾、語り手はそのことを指示代名詞 *dieser* によっても際立たせているのである。W. フロイントは、遅くともゲーテが「ノヴェレとはおこった未曾有の出来事以外の何であるというのか」と述べて以来、ノヴェレは出来事 (Begebenheit) あるいは事件 (Ereignis) と関連するようになり、それらが「じっさいに起こったこと (Vorgefallenes)」(傍点は引用者) を指すようになったという³¹⁾。このように、「出来事」は、ノヴェレの性質とも密接な関係にあるのだが、『拾い子』の語り手は、作品の展開にとって欠くことのできない出来事を文字通り「出来事 (Vorfall)」という語で、しかも近接の指示代名詞をそえて読者に提示する。その結果、読者は、小説の力点がいったいどこにおかれ

ているのかを意識するのである。

ところで、また別の角度からも「出来事 (Vorfall)」の重要性を指摘することができる。クライストの作品にあってはしばしば -fall という形態素が重要な役割を果たす。形態素としての -fall は、これまでクライスト研究においてもしばしば注目されてきた³²⁾。この形態素が典型的にあらわれるのは、おそらく『チリの地震 (Das Erdbeben in Chili)』であろう。作品の冒頭、語り手は、主人公イエローニモがヨゼーフエと修道院の庭で会ったのは「偶然 (Zufall)」であったと語る。「偶然」はまた自死のためのロープをイエローニモに用意するが、そのとき地震がおり、イエローニモは「転ばないように (um nicht umzufallen)」柱につかまる。崩れ落ちる建物は「偶然のアーチ (zufällige Wölbung)」となる。そして、イエローニモは副王に「平伏して (Fußfall)」弁解することを望むが、ヨゼーフエはまずラ・コンセプションにゆき、そこから手紙で副王に許しを乞うことを提案する。そしてその提案をイエローニモは「賞賛 (Beifall)」することになる。このように -fall という形態素は『チリの地震』においてきわめて有効に機能している。この形態素について、ポール・ド・マンは、クライストの珠玉のエッセイ「マリオネット劇場 (Über das Marionettentheater)」について書かれた文章の中でつぎのようにいっている。

さらに、物語が終わるまでには、"Fall" という語が、神学的な〈墮落〉から人形の振り子のような死んだ手足を経て、名詞や代名詞の文法的語形変化まで広げていくようなやり方で過剰な要因によって決定されてしまったとき、"Fall" という語を含むいかなる合成語 (Beifall, Sündenfall, Rückfall あるいは Einfall など) も意味の分離的複数性を獲得していく³³⁾。

執拗に形態素 -fall を反復する『チリの地震』ほどヴァリエーションは豊かではないが、『拾い子』においてもやはり作品の転換点で形態素 -fall が集中していることは注目に値するだろう。近接の指示代名詞で修飾された Vorfall は、

先行するテキストとの密接な結束を強調しつつ作品の勘所を示唆する。くわえて、この強調される語彙が形態素 -fall を含むことで、主人公ニコロの「墮落」が暗示されているのかもしれない。

7. むすび

本稿では、テキストの結束性という観点から『拾い子』の文体を考察した。その結果、この作品において、われわれは、結束性のもたらす多様な文体的効果を確認することができた。

第一に、この作品の冒頭部分では、指示代名詞による強固な結束がみられた。一般に小説の読者は、作品のはじまりと終わりを一種の「枠」として読み、冒頭を読むことで虚構世界との関わり方を知る。その意味で、この作品の冒頭は、読者を作品世界の中へと強く導くものである。第二に、『拾い子』では、文接続辞としての und がしばしばみられた。それらは従属的、形式的、そして談話の継ぎ目として使用されていた。これにより語り手は、文と文とのあいだに劇的な休止を挿入し、しかし同時に談話のつながりを強調、継続することができる。第三に、クライストの短編小説の冒頭は、場面の設定や作中人物を導入することが多い。『拾い子』も基本的にはそうであるが、主人公ニコロの名前はただちに登場しない。つまり、「指示」、「語彙的結束」により固有名詞の導入が引き延ばされるのだが、それはクライストの作品において重要な位置を占めるアナグラムを効果的なものとするためであった。第四に、『拾い子』では、近接の指示代名詞 dieser の付加語的用法が効果的に使用されていた。語り手はこの指示代名詞による結束性で作品の転換点を示唆していたのであった。

クライストの語り手は客観的であるといわれる。じっさい、18世紀は、語り手が背後に退くような、いわば、客観的な語り方が要請された時代でもあった。クライストの語り手も、連続する事件を距離をおいて語るかのようにみえる。しかし、すくなくとも『拾い子』に関していえば、語り手は読者の存在をかな

り意識しているということが、結束性の構造からあきらかになったのではないだろうか。語り手は、強固な結束により、読者の興味を持続させようとするのである。

註

本稿は2004年に京都大学に提出された課程博士論文『ハインリヒ・フォン・クライストの文体——文体論からのアプローチ』の第2部第3章「テキストの結束性と文体——クライストの『拾い子』を例にして——」を加筆修正したものである。なお、翻訳のあるものについてはその訳文を拝借し、訳書の頁数を記した。

- 1) ここでいう文体論とは、現代言語学を文学テキストの分析に応用する学問領域のことである。詳細は拙稿(2000)(2007)を参照されたい。
- 2) Halliday/Hasan (1997: 5)
- 3) Vgl. Vater (1992), Duden (1998)
- 4) Vater (1992: 35; 41f.)ただし、「指示」などの下位範疇に関しては、フェーターもハリデー／ハサンとほぼ同じである。
- 5) Vgl. Brinker (1997: 18)
- 6) Vater (1992: 34)
- 7) Vater (1992: 39)
- 8) Vater (1992: 35)
- 9) Gutwinski (1976)
- 10) Harweg (1972: 71)
- 11) Vgl. Raible (1971)
- 12) 一覧表における略記号 R は「指示」、L は「語彙的結束」、E は「省略」、C は「接続」、M は仲介の中間文の数をそれぞれあらわす。それ以外の詳細に関しては、Halliday/Hasan (1997: 432-440)を参照されたい。
- 13) クライストからの引用は、Sämtliche Werke und Briefe, hrsg. von Helmut Sembdner, 2. Bd., 9., vermehrte und revidierte Auflage. München 1993 (SW)により、本文中にカッコでページ数を示す。なお、イタリックによる強調は引用者による。
- 14) Christensen (1967: 44)
- 15) Helbig/Buscha (1982: 508)
- 16) Helbig/Buscha (1982: 508-11)
- 17) Helbig/Buscha (1982: 533)

- 18) Helbig/Buscha (1982: 533f.)
- 19) 岩崎英二郎・小野寺和夫 (1969: 528ff.)
- 20) Duden (1998: 84)
- 21) Helbig/Buscha (1982: 412)
- 22) Vgl. Plett (1975: 64f.)
- 23) 『拾い子』におけるドッベルゲンガー・モチーフについては Göttler (1983: 20f.)
を参照されたい。
- 24) SW (1993: 905)
- 25) Wolff (1954: 54)
- 26) 『拾い子』においては、指示代名詞 *dieser* の独立的用法もみられるが、ここでは付加語的用法に限定する。
- 27) Weinrich (2003: 440)
- 28) Ebd.
- 29) Weinrich (2003: 443f.)
- 30) Vgl. Schröder (1985)
- 31) Freund (1998: 33)
- 32) Vgl. Wellbery (1993: 71)
- 33) De Man (1998: 289)

文献一覧

- Brinker, K. (1997): *Linguistische Textanalyse. Eine Einführung in Grundbegriffe und Methoden.* 4., durchges. und ergänzt. Aufl. Berlin.
- Christensen, F. (1967): *Notes toward a New Rhetoric.* Harper & Row.
- Duden (1998): *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache.* 6., neu bearbeitete Aufl. Mannheim.
- Freund, W. (1998): *Novelle.* Stuttgart.
- Göttler, F. (1983): *Handlungssysteme in Heinrich von Kleist's "Der Findling". Diskussion und Anwendung narrativer Kategorien und Analyseverfahren.* Frankfurt am Main/Bern.
- Gutwinski, W. (1976): *Cohesion in Literary Texts.* Mouton.
- Halliday, M. A. K./Hasan, R. (1976): *Cohesion in English.* London. 〈安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭轉 (訳) (1997) 『テキストはどのように構成されるか』 ひつじ書房〉
- Harweg, R. (1972): *Stilistik und Textgrammatik.* In: *LiLi. Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik* 2. H. 5. S. 71-81.

- Helbig, G./J. Buscha (1977): Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. 4., durchges. Aufl. Leipzig. (在間進 (訳) (1982) 『現代ドイツ文法』三修社)
- de Mann, P. (1984): The Rhetoric of Romanticism. New York. (山形和美/岩坪友子 (訳) (1998) 『ロマン主義のレトリック』法政大学出版局)
- Plett, H. F. (1975): Textwissenschaft und Textanalyse. Heidelberg.
- Raible, W. (1971): Linguistik und Literaturkritik. In: Linguistik und Didaktik 2. H. 8. S. 300-313.
- Schröder, J. (1985): Kleists Novelle "Der Findling". Ein Plädoyer für Nicolò. In: Kleist-Jahrbuch (1985), S. 109-127.
- Vater, H. (1992): Einführung in die Textlinguistik. München.
- Weinrich, H. (2003): Textgrammatik der deutschen Sprache. 2. Aufl. Hildesheim.
- Wellbery, D. E. (Hrsg.)(1993): Positionen der Literaturwissenschaft. Acht Modellanalysen am Beispiel von Kleists "Das Erdbeben in Chili". 3. Aufl. München.
- Wolff, H. M. (1954): Heinrich von Kleist. Die Geschichte seines Schaffens. Bern.
- 岩崎英二郎・小野寺和夫 (編) (1969) : 『ドイツ語不変化詞辞典』白水社
- 廣川 智貴 (2000) : 文体論の理論と実践——クライストの『ロカルノの女乞食』を例にして——, 京都大学大学院独文研究室『研究報告』第14号, 1-17頁。
- 廣川 智貴 (2007) : ドイツ語文体論における教育文体論の可能性について, 大谷大学西洋文学研究会『西洋文学研究』第27号, 20-35頁。

(本学専任講師)
(2010年3月31日受理)